

このツアーへの参加動機に、「自分が、震災復興のために何ができるか。」そんな使命感みたいなものは全くなく、女優の木村文乃さんが出ている「行くぜ、東北。」というキャッチコピーのJR東日本のテレビCMや、駅のポスターを見て、「久しぶりに、東北に行ってみよう。」という気になっていたところ、校友会報の「東北応援ツアー」が目にとまったのがツアー参加のきっかけです。

いざ被災地を視察してみると、「ここには何があったのだろう」、「本当にここで人々が生活していたのか」と感じる場所ばかりで、津波の脅威・爪痕の、計り知れない大きさに、ただ唖然としました。津波によって「何も無い」場所になったところは、今も人はまばらで、復興へ向け、工事車両が出入りし、重機が稼働している場所は、まだ良いほうで、いまだに行方不明の家族を探し続けている人がいるほとんど手つかずの場所もあり、3年半が経っても人々が戻って暮らせるようには、全然なっていません。

高台移転や土地のカサ増し（土を入れて土地を高くすること）をして、新たな街づくりをしても被災地で暮らしていた方の多くは高齢者であり、一旦人がいなくなった土地に、果たして人は戻るのか、人口が減り、赤字国債で何とかやりくりしている日本の現状で、長期に渡って、多額の税金を使い続ける公共事業依存の復興計画でよいのか、そういう考えも浮かびました。震災からの復興、復旧はとて長い時間とお金がかかります。復興、復旧という言葉よりは、むしろ

創生(作り出すこと)という観点から、街づくりを一から始めるべきだと思いました。創生の想いを強く持って行動されていたのが、女川町で生まれ育った震災の語り部の女性で、「死んでたまるか。」「負けてたまるか。」「千年に一度の街づくりを、楽しんでやろう。」という気概がとても頼もしく、いつかまた訪れたいと思えた、女が強い「女川町」でした。

株式会社木の屋石巻水産、株式会社ささ圭 は、多くの方々の支援と、ご自身のたゆまぬ努力で、復興の狼煙を上げていました。木の屋さん、ささ圭さんの、希望を捨てず、諦めない、不撓不屈の精神と、謙虚さと感謝の気持ち忘れぬ姿勢に、とても感動しました。

「被災地に来ていただくことが、何よりの復興支援。」仙台バス株式会社のバスガイドさんが、ツアーの終盤におっしゃった一言が、心に残る重要な意味を持つ言葉です。つまり、被災地に来る交流人口を増やし、そこでお金を使ってもらい、経済活動を活発にして、雇用を生み、帰還者や移住者を増やし、定住人口を増やす。そういう流れを生み出す上で、「被災地に行って、お金を使って、被災地の現状を誰かに伝えて、また誰かが被災地に足を運ぶ」ということが、負担にならず、長続きする復興支援の形なのだ。

人口減少、超高齢化が進む日本の、お手本となるような街づくりが行われていく東北の被災地。震災後の東北について評価をくださるのは、歴史なのかも知れません。後世の人たちから褒めてもらえる東北、日本にしたいと思ひ、また東北を訪れようと思ひます。

「未来を信じ 未来に生きる。」 末川博先生の言葉が頭に浮かぶ、東北の旅でした。